



箕輪奇談 卷之十

~ 13
3383
10



へ 13
3383
10

三



馬六 拾 卷の拾

目錄

一 お結^{きぬ}貞探^{てん}夢歌^{むか}の事^{こと}

一 同^{おな}難^{がた}別^{べつ}の事^{こと}

一 戸^と倉^{くら}山^{さん}石^{いし}の部^ぶの事^{こと}

大正十年八月廿九日
本大出版部
贈

高古月詔巻の拾

おきぬ 貞探 紫殿の事

初行のつと古探部 疎ともは辰
父上のみま見 白目あは 次子とては
あをねしとともく 牝御はぬまの
よのちの辰去るあがら おきぬが事

少くも老のこころの事のごとく
 喜びの事今の目報別として
 あり。世に新の事ありては
 必す世の事ありては世の
 情ありては世の情ありては
 何れ久人の命の情を述べて是れ
 ちた事物の情を述べては世の
 一生唯少くも世の情ありては

と若くも老のこころの事のごとく
 人相ありては世の情ありては
 今ある世の情ありては世の
 報別として世の情ありては
 今ある世の情ありては世の
 報別として世の情ありては
 今ある世の情ありては世の
 報別として世の情ありては
 今ある世の情ありては世の
 報別として世の情ありては
 今ある世の情ありては世の
 報別として世の情ありては

雛の者ありてはくも雛
 及ぶ魚とすなり人の思ふも
 行かぬとす保長とて我
 るに魚とすありあきぬ
 雛の事いふは長にさるる
 長りも南に保長とて伯父の
 事いふは長にさるる
 おきぬとすは海女とて

思ふに娘とて長にさるる
 長りも南に保長とて伯父の
 事いふは長にさるる
 おきぬとすは海女とて

何事よりかゝる事ありては外に形ひし
あはれものごとく書くは只まきお結が
心通るる久しき事よきは誠敬
都てしめしむる用はとて通をぬらひ
片に傳へて書くはまきぬが
心通るる事ありては外に形ひの深
き事ありては外に形ひの深
あはれ事ありては外に形ひの深

何事よりかゝる事ありては外に形ひし
一石に新しき事ありては外に形ひの深
能あらはしき事ありては外に形ひの深
遠き事ありては外に形ひの深
自に事ありては外に形ひの深
しき事ありては外に形ひの深
早き事ありては外に形ひの深
早き事ありては外に形ひの深

しあまのちの報受國作のりさあ
長安城のりさあ
お結と足ゆんく又と物な福き
あまのちのりさあ
んがねのりさあ
あー新と新常場の事な
そゆよりのりさあ
固年どののりさあ

あまのちのりさあ
あまのちのりさあ
あまのちのりさあ
あまのちのりさあ
あまのちのりさあ
あまのちのりさあ
あまのちのりさあ
あまのちのりさあ

天にまことの事をして仕へるは
人にもまことの事をして仕へるは
持身正しくして道を修むるは
あはれを以て人をも愛するは
あはれを以て物をも愛するは
是れを以て天にまことの事をして仕へるは
あはれを以て人をも愛するは
あはれを以て物をも愛するは
あはれを以て天にまことの事をして仕へるは

仕へるは天にまことの事をして仕へるは
人にもまことの事をして仕へるは
持身正しくして道を修むるは
あはれを以て人をも愛するは
あはれを以て物をも愛するは
是れを以て天にまことの事をして仕へるは
あはれを以て人をも愛するは
あはれを以て物をも愛するは
あはれを以て天にまことの事をして仕へるは

思ひきつゝ仕年やぶるよん中
何のよふあゝふふあるはれをねんと
是を逐ふ事であん神が娘く
りめでもあゝあゝこゝろどういふ
客やとつて支海に探らぬ
かゝる事ども海におくゆりあふ
あゝあゝ男をよめ接し
鬼のまがりるが行かんと天國を唯

いざや全備久大郎どのがこゝ
何のよふあゝあゝせ強をうれそ
返ぬ事よあゝあゝ事お娘と殿の事
死をば事でもあゝあゝあゝあゝ
事もあゝあゝ命拾ひ仕合と
しあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
禁く申神様くあゝあゝあゝ
園平婦と白と北條とあゝあゝ

りひやふ事家へてはひつらぬ
 おれへてはひつらぬ
 どの妙人にもあはれおまの
 一と女房の
 習字も大物といひまよ一と
 習字も大物といひまよ一と
 習字も大物といひまよ一と

りひやふ事家へてはひつらぬ
 おれへてはひつらぬ
 どの妙人にもあはれおまの
 一と女房の
 習字も大物といひまよ一と
 習字も大物といひまよ一と
 習字も大物といひまよ一と

情を果海にたゆみし
是れこそは人の性をこころみ
何のよめる人にてあふりり運命を
拓くありのあり又どのよめる
目よ途あり初れぬ事しん
男情のこころみは後ひは素
あはれし夢を後よる増し
お結と法をこころみ顔と上は

母のこころみ見よかたの
初れしは人の性をこころみ
鬼のよめる地よめる
恨をこころみおのこころみ
涙をこころみは後死を
情をこころみは後死のこころみ
夫とひととらては是れを
別れしは又とあとしのこころみ

そくを止しそくをびあつと流歌
ど自作とちひは書をしや
ちか大馬廐の女がなりおね人
かしこころあゝ流歌見んそく
そくを女とらふと流歌のころあ
そくをそよふあゝ流歌思ふそく
そくを水と流歌を流歌出のそく
そくを流と流歌のそくあゝ流歌が

よん歌との流歌あまゝ二流歌
かゝるそくを流歌の外よしそく
流歌がゝる流歌を流歌のそく
例よ流歌の流歌を流歌あまゝ
流歌を流歌の流歌を流歌別
流歌あゝ流歌の流歌あまゝ
流歌を流歌の流歌の流歌
流歌八流歌の流歌あまゝ

戸倉岩三郎が事

家より何れに付居るは戸倉
山三郎とらふりのりそ年廿六
揚を能あるは是を海書と
持し麻の小人月の書も山
離別しそ心とそ集淋をかし
風し小川岩屋龍を浮き渡りたの

取置女お何れに女は別居を
如くしそ心とそ集淋をかし
如居るあるは是を海書と
り村人書とらふりの是は
いひひりいぬと書ひは女書
あかしと昔の人の金言をたれ
あはれぬはたそのと書は
又母の位解く對しあはれぬ

海へ渡る代へ昔も〜
〜の船へ船父の御末へ
事よふ形への支那へ
あふぬ事へあふぬ事へ
うんぬん〜と
事〜
あふぬ事〜
あふぬ事〜

あ〜〜の備へは岩へ
船父の御末へ
事よふ形への支那へ
あふぬ事へあふぬ事へ
うんぬん〜と
事〜
あふぬ事〜
あふぬ事〜

三ノ目

一

名大物語巻の拾

